

## ウィトゲンシュタインの独我論 —幸福概念に焦点を当てて—

碓井 康平

本論文では哲学の認識論における独我論という立場について取り扱う。これは、本当に存在しているものは自我とその意識であり、それ以外は全て疑うことができる、と考えるものである。独我論について考えた哲学者は多くいるが、本論文ではウィトゲンシュタインの独我論を取り上げる。その中で、独我論を採ったとしても一般的な「幸福」を享受できるかについて考察していく。

ウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』において、言語を論理的に分析することによって「世界とは何か」という問いに答えようとした。彼によると、世界とは成立している事柄の総体であり、ものの総体ではない。そして成立しうる事柄の総体を論理空間と述べた。そのような世界観を据えながら、世界を構成する事実の論理的な像として「思考」を定義づけた。世界と命題の二つの領域が思考を媒介しながら結びついていて、その3つの領域を結ぶものこそが、論理、像、意味であると考えたのである。

さらにウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』において自らの言語の限界を世界の限界だと述べた。私は私の論理空間内の可能性については思考し語ることができるが、他の論理空間内の可能性について語ることも示すことも出来ないが故に、他の生の可能性もまた語り、示すことはできないとした。このようなウィトゲンシュタインの独我論を野矢は、私以外の意識主体を認めない現象主義的独我論と区別し、存在論的独我論と呼んでいる。

幸福という概念は様々であるが、本論文では現代の若者が考える具体的な幸福として曾我部・本村の論文で言及されている幸福を取り上げた。また、具体的事例を用いる際に青少年研究会の行った若者の生活や意識に関する調査も参照した。それらから、現代の若者にとっても、幸福感を感じることに、他者の存在が関係しているということが明らかになった。

本論文では他者を介在するような現代の若者の幸福感を、ウィトゲンシュタインの独我論を採用したとしても得られるか、思考実験を行った。その結果、野矢の用語を使えば、論理空間内において他人を意識主体ではなく動作主体として捉えることによって、独我論を採ったとしても、他者を介在するような幸福感を得られるということが明らかになった。しかし、独我論を採用した方がより幸福であるという結論には至ることとはならず、独我論を採った方がより有益かどうかに対しては議論の余地が残った。

(指導教員 横山幹子)